

月の花挽歌 ～13. リスク・マネージメント～

13- 2

「私は科野青年会議所のメンバーでもあるので、それなりの情報は自然と耳に入ってきてしまいます……。その噂話を聞いたのは、兄の49日法要が終わって間もなくでした」と途切れ途切れに話す麻里子の頬を、いつの間にか涙が濡らしていた。

「でも、深く知る事が怖くて怖くて、噂は噂として放っておいたのですが、我慢しきれなくなって、義姉にそれとなく打診してみたのですが、埒が明かないのでジリジリしていると間もなく顧問税理士に兄の遺言書を見せられたのです。兄は数社に多額の生命保険を掛けていて、下りた保険金は全て負債の補填に充てられていたのです。それでもなお傘下の味噌会社の負債は賄いきれなくて、そのしわ寄せが屋台骨を脅かしているのです」と麻里子は泣き笑い顔で堰を切ったように話した。

ハンドルを握ったままの女杜氏の左手に、真紀は右手をそっと置いた。

「話してくれて、良かったわ。よく分かりました。何とかかなりそうな案が思い浮かんだので、少し時間をもらえませんか？」と真紀は閃いたアイデアを頭で具体化しながら、女杜氏の手を握り締めて言った。

「真紀さんは兄が本気で好きになった人ですから、お手数をおかけしますが、お任せいたします。ただ、義姉はプライドの塊のような人ですから心配です」と女杜氏は安堵感の中に一抹の不安を漂わせて言った。

「大丈夫よ。どのような人であっても、背に腹は代えられない時があります」と真紀は毅然とした態度を見せて言った。

上田駅から13時台の上り（あさま）に乗り大宮駅を過ぎたあたりで、どこからともなく乗客のざわつき声が車内のあちこちで発せられ、閉じたままの目の奥で、経営危機をおくびにも出さなかったし気配も見せなかった昌幸の胸中を推し量ったり、麻里子との会話の内容を転がしていた真紀は、否応なしにニューステロップのリーマン破綻の記事を見ることになった。

緊急時の連絡網のいの一番にあたるスタッフに真紀は携帯電話で『こはる』への集合を伝え、15時過ぎに東京駅八重洲北口からタクシーに乗った。

10分程で『こはる』に着いた真紀は、一息入れてから、事態の分析に肝要な適任者を顧客の人脈の中から数名ピックアップして、迅速に情報収集を行った。

17時には1名を除き主要スタッフ全員が揃ったので、真紀の対処方針を開陳すると、皆の考えと突き合わせて意見交換をして、急場をしのぐことに役立てた。

年越しをできないで閉店する老舗のクラブも多少あったが、サブプライムローンファンドを保有していなかった日本やアジア地域の金融機関では、あまり影響を受けなかった。